

YMCA Camp 100 Stories Vol. 14



仲間と語り合った
Y M C Aのキャンプファイアーは
自由の象徴だった。

佐久間 邦彦

Sakuma Kunihiko

広島県原爆被害者団体協議会 理事長

▼被爆～自分との投影・Y M C Aとの出会い

私のY M C Aとの出会いは、中学生の時でした。爆心地から生死を分ける半径 2.3～2.5km の地点の実家で生後 9 か月で被爆、爆風によって壁が崩れ、窓ガラスが飛散し、私も額に傷を負い、黒い雨にも打たれました。かろうじて全壊を免れた実家を修理し、幼少期を過ごしました。被爆後 10 年、小学校 5 年の時、原因不明の体調不良に苦しみました。

その翌年、佐々木サダコさんが急性白血病で他界し、その後、広島Y M C Aでは原爆の子の像建立運動が始まります。佐々木さんの方が自分の姿と重なり、中学生から高校生になるまで、この建立運動に参加するようになりました。

当時Y M C Aには、少年部という部所があり、高校生になって入会。高校時代、学校が終わったら放課後は、毎日Y M C Aで色々なサークル活動に参加し、コーラスをやったり、新聞を作ったり、学習補充の講座に参加したり、冬にはクリスマス会や募金活動等も行ないました。学校よりもY M C Aで育ててもらったという思いです。……

そこで夏に宮島キャンプに出会うこととなるのです。



源・健・体の三育と社交の面方面に且る現代的な「多元性教育」の発展のもとで小学生、中学生、高校生児童青少年少女に希望を抱く希望を与える。日本的生活指導と学習指導を児童の理解と從心のうえに、たえず学校や家庭と連絡を保ちながら、創造性の企画を最大限有効に利用して、勉強に遊びにいそしんでいたいものです。

Y M C Aは建物ではありません、運動なのです。学習活動を通して人間像を形成してゆき、グループを通して大問題への理解をより高め、生活の中に自身の力で能力と友情とまほをみいだし、よき仲間になつて明日の社会に青鳥な人材を育成すること目的としています。

1950年代後期の広島Y M C Aのパンフレット

▼宮島のキャンプは、自由のすばらしさを教えてくれた。

YMCAでの毎日は、多くの友人を作ってくれました。当時、広島市内の多くの高校から生徒がYMCAに参加しておりましたが、どんな生徒であっても分け隔てなく公平に接してくれました。YMCAの自由で大らかな雰囲気が自分に合っていて、心許せる居場所であったように思います。夏になり、宮島でのキャンプの話を聞き「みんなでいこうやー」ということになって、ほとんどの友人が参加するようになりました。

1954年から、宮島・山白浦のキャンプ場は、夏の期間だけ特設キャンプサイトを設営し運営されていたようです。当時キャンプサイトのある宮島・山白浦へは、正規の公共交通はなく、米軍の上陸用舟艇で砂浜に乗りつけるという、かなりワイルドな行き方でした。

浜の奥まったところに大きなテントがあり、そこをベースに色々な活動を行いました。海水浴をしたり、クラフトを作ったり、色々なことを体験しましたが、中でもキャンプファイヤーでの仲間との語らいが自分の中では大きな思い出になっています。



上陸用舟艇でキャンプサイトに

1950年代後半から1960年代前半にかけて、広島にはまだ原爆被害の傷跡も多く、親の世代は貧しく、必死に働かなくてはなりませんでした。その中にあって、YMCAでの若者の活動は、新しい時代をむかえるための自由で大らかな夢に満ちた活動でした。

被爆者という健康に不安を抱えながらも、何気ない会話をとおして将来の夢を語り合った友人の時間は、私にとってかけがえのない時間であったように思います。自由の素晴らしさや平和の尊さを実感できる日々でした。



右端が当時高校生の佐久間氏



広島市内の各高校の交流の場でもあった

広島YMCAは、戦後1949年にキャンプ活動を再開。1954年からは宮島南東の海岸、山白浦に夏の期間キャンプ場を開設、夏期キャンプを開始しました。宮島～湯来町～北広島町雲月山と時代にあったキャンプ場の開設を行い、教育・組織キャンプを継続しています。

▼Y M C Aが人生を変えるきっかけになった。

高校を卒業し、一旦大学に進学しましたが、このまま広島で埋もれてしまつていいのか？もっと自分にはやってみたいことがあるのではないか？被爆者としてこのまま広島で生きていけるのか？と思いはじめるようになりました。

その時、日本に舞い込んできたのが「東京オリンピック」でした。東京への憧れとオリンピックに関わりたいという思いは日に日に増していくとともに、その裏には被爆者として背負った十字架から解放され、誰も知らない場所で人生をチャレンジしたい。という思いがあったのだと思います。



Y M C Aのホテル学校時代、東京オリンピックを経験

大学を中退して、東京オリンピックでホテルが新設されていくなか、東京Y M C Aのホテル専門学校に進学することに決めました。広島Y M C Aの宮島キャンプで夢を語り合った仲間たちも背中を後押ししてくれました。東京Y M C Aのホテル学校においても東山荘・山中湖キャンプ場などにも行かせていただき、新しい仲間たちと多くの思い出を作ることができました。

1964年、ホテル専門学校では、プレスセンターのレストランサービスを体験させていただき、休日には国立競技場や代々木オリンピックセンターの体育館なども行かせてもらいました。卒業後は、ヒルトンホテルに就職し、ビートルズの宿泊などの貴重な体験もさせてもらいました。まさにY M C Aとともに青春を過ごしたと言っても過言ではなかったと思っています。人生をサポートしてもらいました。



ホテル学校の仲間と行った山中湖キャンプ場



青春を過ごしたホテル学校の寮

平和・自由の尊さを教えてくれたキャンプ。だから平和のために生きる。

私は現在、広島県にある原爆被害者団体協議会（以後、被団協）の理事長をさせていただいている。被団協とのかかわりは、退職をしてからの 2006 年から始まりました。被爆者という十字架を背負っていることは、私の人生の転換期の中で多くの試練を与えられました。東京に出るときはその重荷を下ろしたい一心で、新しい世界に飛び出したことも事実ですが、やはり、最後は広島の人間は広島に根ざして生きていくべきであるという思いもあり、被団協の活動を続けています。その根幹にあるのは、Y M C A で取り組んだ佐々木禎子さんの原爆の子の像の建立活動や少年部の宮島キャンプで経験することができた、戦後の自由で大らかな平和な世界を守りたいということもあるかもしれません。



キャンプファイヤーの炎をみつめながら、仲間と夢を語り合った時間やそのことで培われた心の豊かさ、自分以外の人達を思いやれる気持ちを持つこと等、人間にとて大切なことをキャンプは教えてくれます。また、私の場合、東京に旅立つ際には、キャンプ生活を通して結ばれた友達との絆が自分の人生もサポートをしてくれました。

まさに、そういった人と人とのつながりによって平和な世界が作られていくのだと思います。 Y M C A のキャンプ 100 周年を迎える、その歴史の一部として、少年期に関わったことをうれしく思いますし、現在の平和活動に関われる基礎を作っていただいたことに感謝しています。

Profile



1944 年	10月 20 日生 73 歳
1945 年	8月 6 日 広島市西区で被爆。
1955 年	原爆の子の像建立運動に参加 山陽高等学校在学中広島 Y M C A 少
～ 58 年	年部会員として活動。大学に進学するが、東京への上京のため中退。
1964 年	東京 Y M C A ホテル専門学校に進学。在学中、東京オリンピックプレスセンター等でのレストランサービス等を経験
1965 年	ヒルトンホテル入社
1971 年	一身上の都合のため広島に帰省その後、三菱重工広島に就職
2006 年	三菱重工広島退職 広島県原爆被害者団体協議会活動開始
2015 年	広島県原爆被害者団体協議会 理事長就任

【取材 公益財団法人 広島 Y M C A 国際コミュニティーセンター 事務局長 中奥 岳生
学校法人広島 Y M C A 学園 広島 Y M C A 野外教育センター センター長林 健児郎】